

矢部浩二

永遠

— 切り取られた瞬間 —

朝に注がれた一杯のコーヒー

そこに永遠を見つけることは容易い

失われた彼女の微笑み

どの場所であったか、もう思い出せない

公園での花言葉のやりとり

雨に手をかざす その仕草

私の肩は覚えているけれど

私の死とともに失われていくであろう

思い出の数々

この地球ほしにあふれているやさしさのすべてが

短冊のように

空から降り注いでいる